

第3部 コンパクト Lie 群の表現

17 ウェイト空間分解

17.1 定理. G をコンパクト連結 Lie 群とし G の極大トーラス T を 1 つとる。 \mathfrak{g} と \mathfrak{t} をそれぞれ G と T の Lie 環とする。 (ρ, V) を G の有限次元複素表現とし、

$$V_\lambda = \{v \in V \mid \rho_*(H)v = \sqrt{-1}\lambda(H)v \ (H \in \mathfrak{t})\} \quad (\lambda \in \mathfrak{t}^*)$$

$$W(\rho, V) = \{\lambda \in \mathfrak{t}^* \mid V_\lambda \neq \{0\}\}$$

とおくと、

$$V = \sum_{\lambda \in W(\rho, V)} V_\lambda$$

が成り立ち、右辺の和は直和になる。

証明. 表現 $\rho : G \rightarrow GL(V)$ を T に制限した表現 $\rho : T \rightarrow GL(V)$ を定理 2.10 により既約分解し

$$\mathfrak{g}^{\mathbb{C}} = \bigoplus_{i=1}^n V_i$$

とする。命題 4.2 より各 V_i は 1 次元になる。 $T \cong T^k$ とし T と T^k を同一視すると定理 4.6 より各 V_i について $m_1, \dots, m_k \in \mathbb{Z}$ が存在し

$$\text{Ad}(t_1, \dots, t_k)|_{V_i} = t^{m_1} \dots t^{m_k} \quad (t = (t_1, \dots, t_k) \in T)$$

となる。 T の指数写像は

$$\begin{aligned} \exp : \mathfrak{t} = \mathbb{R}^k &\longrightarrow T = T^k \\ ; (x_1, \dots, x_k) &\longmapsto (e^{\sqrt{-1}x_1}, \dots, e^{\sqrt{-1}x_k}) \end{aligned}$$

だから

$$\lambda_i(x_1, \dots, x_k) = m_1 x_1 + \dots + m_k x_k \quad ((x_1, \dots, x_k) \in \mathfrak{t})$$

とおくと、 $\lambda_i \in \mathfrak{t}^*$ で

$$\rho_*(H)v = \sqrt{-1}\lambda_i(H)v \quad (v \in V_i)$$

が成り立つ。これより $V_i \subset \mathfrak{g}_{\lambda_i}$ となり $\lambda_i \in W(\rho, V)$ 。よって

$$V = \sum_{\lambda \in W(\rho, V)} V_\lambda$$

は直和分解になる。

17.2 定義. 定理 17.1 において $V_\lambda \neq \{0\}$ となる $\lambda \in \mathfrak{t}^*$ を (ρ, V) の \mathfrak{t} に関するウェイトと呼び、 V_λ を λ のウェイト空間と呼ぶ。また、直和分解

$$V = \sum_{\lambda \in W(\rho, V)} V_\lambda$$

を (ρ, V) の \mathfrak{t} に関するウェイト空間分解と呼ぶ。ウェイト λ に対して $m_\lambda = \dim V_\lambda$ を λ の重複度と呼ぶ。

17.3 注意. 第 10 節で定義したルートは随伴表現のウェイトということになる。ルートの場合は 0 を除いて重複度は必ず 1 であったが (定理 10.3)、一般のウェイトの重複度は 1 になるとは限らない。

17.4 例. ユニタリ群 $U(n)$ について例 10.4 と同じ設定条件のもとで $U(n)$ の \mathbb{C}^n への自然な作用 $\iota: U(n) \rightarrow GL(n, \mathbb{C})$ について考えよう。 i 成分のみが 1 で他の成分はすべて 0 であるような n 次元縦ベクトルを E_i で表す。すると $x_1, \dots, x_n \in \mathbb{R}$ に対して

$$\iota_* \begin{bmatrix} \sqrt{-1}x_1 & & \\ & \ddots & \\ & & \sqrt{-1}x_n \end{bmatrix} E_i = \sqrt{-1}x_i E_i.$$

そこで例 10.4 で定めた e_i を使うと

$$W(\iota, \mathbb{C}^n) = \{e_i | 1 \leq i \leq n\}$$

がわかる。さらに上の計算より

$$\mathbb{C}^n_{e_i} = \mathbb{C}E_i$$

となり

$$\mathbb{C}^n = \sum_{i=1}^n \mathbb{C}E_i$$

が (ι, \mathbb{C}^n) の \mathfrak{t} に関するウェイト空間分解になる。

17.5 命題. G をコンパクト連結 Lie 群とし G の極大トーラス T を 1 つとる。 \mathfrak{g} と \mathfrak{t} をそれぞれ G と T の Lie 環とする。 (ρ_1, V_1) と (ρ_2, V_2) を G の有限次元複素表現とすると

$$\begin{aligned} W(\rho_1 \oplus \rho_2, V_1 \oplus V_2) &= W(\rho_1, V_1) \cup W(\rho_2, V_2) \\ W(\rho_1 \otimes \rho_2, V_1 \otimes V_2) &= \{\lambda_1 + \lambda_2 | \lambda_1 \in W(\rho_1, V_1), \lambda_2 \in W(\rho_2, V_2)\} \end{aligned}$$

が成り立つ。また (ρ_1, V_1) と (ρ_2, V_2) が同値ならば $W(\rho_1, V_1) = W(\rho_2, V_2)$ となる。

証明. $(\rho_1 \oplus \rho_2, V_1 \oplus V_2)$ のウェイト空間分解は

$$V_1 \oplus V_2 = \sum_{\lambda_1 \in W(\rho_1, V_1)} V_{\lambda_1} \oplus \sum_{\lambda_2 \in W(\rho_2, V_2)} V_{\lambda_2}$$

となるので

$$W(\rho_1 \oplus \rho_2, V_1 \oplus V_2) = W(\rho_1, V_1) \cup W(\rho_2, V_2)$$

が成り立つ。

テンソル積の定義より $H \in \mathfrak{t}$, $v_1 \in V_1$, $v_2 \in V_2$ に対して

$$((\rho_1 \otimes \rho_2)_*(H))(v_1 \otimes v_2) = ((\rho_1)_*(H)v_1) \otimes v_2 + v_1 \otimes ((\rho_2)_*(H)v_2)$$

となるので、 $\lambda_1, \lambda_2 \in \mathfrak{t}^*$ に対して

$$(V_1)_{\lambda_1} \otimes (V_2)_{\lambda_2} \subset (V_1 \otimes V_2)_{\lambda_1 + \lambda_2}$$

が成り立つ。したがって

$$V_1 \otimes V_2 = \sum_{\substack{\lambda_1 \in W(\rho_1, V_1) \\ \lambda_1 \in W(\rho_1, V_1)}} (V_1)_{\lambda_1} \otimes (V_2)_{\lambda_2} \subset \sum_{\substack{\lambda_1 \in W(\rho_1, V_1) \\ \lambda_1 \in W(\rho_1, V_1)}} (V_1 \otimes V_2)_{\lambda_1 + \lambda_2}$$

となるので

$$V_1 \otimes V_2 = \sum_{\substack{\lambda_1 \in W(\rho_1, V_1) \\ \lambda_1 \in W(\rho_1, V_1)}} (V_1 \otimes V_2)_{\lambda_1 + \lambda_2}.$$

これより

$$W(\rho_1 \otimes \rho_2, V_1 \otimes V_2) = \{\lambda_1 + \lambda_2 \mid \lambda_1 \in W(\rho_1, V_1), \lambda_2 \in W(\rho_2, V_2)\}$$

がわかる。

$\varphi: V_1 \rightarrow V_2$ を G 同型写像とする。 $X \in \mathfrak{g}$, $v_1 \in V_1$ に対して

$$((\rho_2)_*X)\varphi v = \varphi((\rho_1)_*X)v$$

となるので、 $\lambda \in \mathfrak{t}^*$ に対して

$$\varphi((V_1)_\lambda) = (V_2)_\lambda$$

となる。したがって $W(\rho_1, V_1) = W(\rho_2, V_2)$ となる。

17.6 定理. $G, T, \mathfrak{g}, \mathfrak{t}$ については定理 17.1 と同じ設定条件のもとで、

$$\begin{aligned} \mathfrak{t}_e &= \{H \in \mathfrak{t} \mid \exp H = e\} \\ \Lambda(G) &= \bigcup_{[\rho, V] \in D_{\mathbb{C}}(G)} W(\rho, V) \end{aligned}$$

とおくと

$$\begin{aligned} \Lambda(G) &= \{\lambda \in \mathfrak{t}^* \mid \lambda(\mathfrak{t}_e) \subset 2\pi\mathbb{Z}\} \\ \mathfrak{t}_e &= \{H \in \mathfrak{t} \mid \Lambda(G)H \subset 2\pi\mathbb{Z}\} \end{aligned}$$

が成り立つ。

証明. $[\rho, V] \in D_{\mathbb{C}}(G)$, $\lambda \in W(\rho, V)$, $v \in V_\lambda$ と $H \in \mathfrak{t}$ に対して

$$\rho_*(H)v = \sqrt{-1}\lambda(H)v$$

となるので

$$\rho(\exp H)v = e^{\sqrt{-1}\lambda(H)}v$$

が成り立つ。

そこで $H \in \mathfrak{t}_e$ とすると $\exp H = e$ だから $e^{\sqrt{-1}\lambda(H)} = 1$ となり $\lambda(H) \in 2\pi\mathbb{Z}$ 。したがって

$$\begin{aligned}\Lambda(G) &\subset \{\lambda \in \mathfrak{t}^* \mid \lambda(\mathfrak{t}_e) \subset 2\pi\mathbb{Z}\} \\ \mathfrak{t}_e &\subset \{H \in \mathfrak{t} \mid \Lambda(G)H \subset 2\pi\mathbb{Z}\}\end{aligned}$$

となる。

以下でそれぞれの逆の包含関係を示す。 $\lambda \in \mathfrak{t}^*$ が $\lambda(\mathfrak{t}_e) \subset 2\pi\mathbb{Z}$ を満たすとする。 $\chi : T \rightarrow \mathbb{C}$ を $\chi(\exp H) = e^{\sqrt{-1}\lambda(H)}$ によって定めることができ、 χ は準同型写像になる。

$$\mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_{\chi} = \{f \in \mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G) \mid f(gt^{-1}) = f(g)\chi(t) \ (g \in G, t \in T)\}$$

とおく。 $\mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_{\chi}$ は $(\tau(*, e), (\mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G), \|\cdot\|_{\infty}))$ の G 不変閉部分空間になる。したがって $(\tau(*, e), (\mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_{\chi}, \|\cdot\|_{\infty}))$ も G の複素表現になる。 T の Haar 測度を ν で表し、写像

$$\varphi : \mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G) \rightarrow \mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_{\chi}$$

を

$$(\varphi(f))(g) = \int_T f(gt)\chi(t)d\nu t \quad (g \in G, f \in \mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G))$$

によって定める。すると $s \in T$ に対して

$$\begin{aligned}(\varphi(f))(gs^{-1}) &= \int_T f(gs^{-1}t)\chi(t)d\nu t \\ &= \int_T f(gs^{-1}t)\chi(s^{-1}t)\chi(s)d\nu t \\ &= \int_T f(gt)\chi(t)d\nu t\chi(s) \\ &= (\varphi(f))(g)\chi(s)\end{aligned}$$

となるので $\varphi(f)$ は $\mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_{\chi}$ に含まれる。 T 上の連続関数 $\bar{\chi}$ を G 全体に連続に拡張した関数を $\bar{\chi}'$ とすると、

$$(\varphi(\bar{\chi}'))(e) = \int_T \bar{\chi}'(t)\chi(t)d\nu t = \int_T |\chi|^2 d\nu = 1 \neq 0$$

となるので、 $\mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_{\chi} \ni \varphi(\bar{\chi}') \neq 0$ で $\mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_{\chi} \neq \{0\}$ 。そこで Peter-Weyl の定理より $\mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_{\chi}$ 内に G 不変既約部分空間 V をとることができる。 $V \neq \{0\}$ だから $f(e) \neq 0$ となる V の元 f が存在する。この f に対して

$$f^{\natural}(g) = \int_T f(tg)\chi(t)d\nu t \quad (g \in G)$$

とおく。ここで

$$f(tg)\chi(t) = \chi(t)(\tau(t^{-1}, e)f)(g) \quad (g \in G)$$

で $\chi(t)\tau(t^{-1}, e)f \in V$ だから $f^\natural \in V$ となる。さらに $f \in V \subset \mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)_\chi$ だから

$$f^\natural(e) = \int_T f(t)\chi(t)dv_t = \int_T f(e)dv f(e) \neq 0$$

となり $f^\natural \neq 0$ 。また $s \in T$ に対して

$$\begin{aligned} (\tau(s, e)f^\natural)(g) &= f^\natural(s^{-1}g) \\ &= \int_T f(ts^{-1}g)\chi(t)dv_t \\ &= \int_T f(ts^{-1}g)\chi(ts^{-1})\chi(s)dv_t \\ &= \int_T f(tg)\chi(t)dv_t\chi(s) \\ &= \chi(s)f^\natural(g) \end{aligned}$$

となるので

$$\tau(s, e)f^\natural = \chi(s)f^\natural$$

が成り立つ。 χ の定め方より

$$\tau(\exp H, e)f^\natural = e^{\sqrt{-1}\lambda(H)}f^\natural \quad (H \in \mathfrak{t})$$

となる。この式を微分すると $f^\natural \in V_\lambda$ となり $\lambda \in \Lambda(G)$ がわかる。以上で

$$\Lambda(G) = \{\lambda \in \mathfrak{t}^* \mid \lambda(\mathfrak{t}_e) \subset 2\pi\mathbb{Z}\}$$

を示すことができた。

$H \in \mathfrak{t}$ が $\Lambda(G)H \subset 2\pi\mathbb{Z}$ を満たすとする。このとき任意の $[\rho, V] \in D_{\mathbb{C}}(G)$, $\lambda \in W(\rho, V)$ と $v \in V_\lambda$ について

$$\rho(\exp H)v = e^{\sqrt{-1}\rho_*(H)}v = e^{\sqrt{-1}\lambda(H)}v = v$$

となり、定理 17.1 より V はウェイト空間の直和になるので

$$\rho(\exp H)w = w \quad (w \in V)$$

が成り立つ。これが任意の $[\rho, V] \in D_{\mathbb{C}}(G)$ について成り立つのだから、Peter-Weyl の定理より

$$\tau(\exp H, e)f = f$$

が任意の $f \in \mathcal{K}^{\mathbb{C}}(G)$ について成り立つ。特に

$$f(e) = (\tau(\exp H, e)f)(e) = f(\exp(-H))$$

となり $-H$ は \mathfrak{t}_e に含まれる。したがって $H \in \mathfrak{t}_e$ となる。以上で

$$\mathfrak{t}_e = \{H \in \mathfrak{t} \mid \Lambda(G)H \subset 2\pi\mathbb{Z}\}$$

を示すことができた。

17.7 注意. 定理 17.6 において

$$\Lambda(G) = \cup\{W(\rho, V) \mid (\rho, V) \text{ は } G \text{ の有限次元複素表現}\}$$

となることが、定理 2.10 と命題 17.5 からわかる。